

ダニエル書7章15-28節 「聖徒たちによる御国の相続」

1A 四人の王国 15-18

2A 第四の獣 19-22

3A 聖徒たちに挑む戦い 23-28

1B いと高さ方への冒瀆 23-25

2B 獣への裁き 26-28

本文

ダニエル書7章を開いてください、私たちの聖書の学びは、ダニエル書7章の14節まで来ました。7章で私たちは、大海から出てくる四頭の獣の幻を見えています。第一が、翼をもっている獅子のような獣、第二が熊のような獣、第三が、四つの頭、四つの翼を持つ豹でした。そして第四が、地上の獣では形容できない恐ろしい姿でした。十本の角を持ち、鉄の牙を持っていました。そして、小さな角が十本の角の間から出て来て、三本を倒し、人間の目をもって、大言壮語する口が与えられていました。

そして私たちは前回、幻が天の御座に移ったところを見ました。年を経た方がおられて、衣は真っ白で、御座から火の炎が出ていました。無数の御使いがこの方に仕えています。それから、さばきが行われ、第四の獣とその小さな角が、燃える火に投げ込まれます。その次に、人の子が天の雲とともに来られて、年を経た方のところに導かれて、この方から人の子が、主権と榮譽、国が与えられました。それが永遠の主権でした。

ここまで、その意味するところを解き明かしながら、少しずつ見てきました。けれども、ダニエル自身はもちろん、その解き明かしがなく幻を見ていたままです。それで次に、悩んで、怯えているダニエルに、御使いがかたわらにいて、それらを解き明かす場面が出てきます。

1A 四人の王国 15-18

¹⁵ 私ダニエルの心は私のうちで悩み、頭に浮かんだ幻は私をおびえさせた。

ダニエルはこれまで異邦人の王たちが見た夢や幻を解き明かしてあげました。けれども、自分自身が見た夢と幻については分かりませんでした。この悩みは最後の最後まで続き、12章で御使いとダニエルが話しているとき、御使いが、「12:9 **ダニエルよ、行け。このことばは終わりの時まで秘められ、封じられているからだ。**」と、元々、今の時点では解き明かすことのできない部類のものであることを伝えたのです。これほどまでに生々しい幻なのに、それを知ることのできないもどかしさが伝わってきます。そしてダニエルの恐れは、獣の凄まじさもさることながら、そしてその獣

を滅ぼす神の御力にもあったでしょう。天の姿を啓示された人は、どの預言者も自分は今もうだめだ、と倒れてしまうようになっています。神の預言者となったものは、「人間の罪の凄まじさ」を見せつけられることがあります。そして同時に、「神の公正な裁きと、その力」をも生々しく教えられることがあります。

¹⁶ 私は、傍らに立っていた者たちの一人に近づき、このことすべてについて、彼に願って確かめようとした。すると彼は私に答えて、そのことの意味を告げてくれた。¹⁷『これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。¹⁸ しかし、いと高き方の聖徒たちが国を受け継ぎ、その国を永遠に、世々限りなく保つ。』

ダニエルに解き明かしをするのは御使いたちです。8、9 章ではガブリエルが来ています。10 章から 12 章には、主イエス・キリストご自身ではないかと思われる方が、ダニエルに教えています。

彼は短く解き明かしました。「これら四頭の大きな獣は、地から起こる四人の王である。」これまで解き明かした通りです。そして、新しいことを語っています。「いと高き方の聖徒たちが国を受け継ぐ」ということです。

神は人をご自分のかたちに造られてから、ご自分が造られた物を人に支配させることを考えておられました。「創 1:26 こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」ご自分が全てのものを支配されているように、ご自分に似せて造られた人にもその支配と所有を与えようと意図されました。だから、人は、所有し、統治をするということにおいて神の目的を果たすことができます。

けれどもアダムが罪を犯して、その支配権を喪失しました。悪魔に移ってしまいました。それを奪還するために神はキリストをこの地に遣わされて、キリストの血によって私たちに贖ってくださったのです。そして贖われた者たちが、神の国をキリストにあって支配する王とし、神の祭司とすることを意図しておられます。「黙 1:6 また、ご自分の父である神のために、私たちを王国とし、祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくあるように。アーメン。」このように、御国を受け継ぐことについての約束があります。私たちは、その備えができていますでしょうか。小さなことに忠実であることをイエス様は教えられました。前回のコリント第一 6 章の学びでも、小さな事柄をなぜあなたがたは、裁けないで、信じていない人々、世の裁判官で訴えるのか？とパウロは叱責していました。私たちは、主に任されたこと、その働き、責任のある働きをしておられるでしょうか？

2A 第四の獣 19-22

¹⁹ それから私は、第四の獣について確かめたいと思った。それは、ほかのすべての獣と異なっていて、非常に恐ろしく、牙は鉄、爪は青銅で、食らってはかみ砕いて、残りを足で踏みつけていた。

ダニエルは第四の獣のことが知りたいと興味を持ちました。あまりにも他の獣と違うので、一体何なのか？と驚愕していたのでしょう。そしてその描写を繰り返していますが、先ほどの描写にはなかったものを二つ加えられています。一つは爪が青銅であることです。もう一つは、小さな角が三本の角を倒した後、他の角よりも大きくなっていることです。

²⁰ その頭には十本の角があり、もう一本の角が出て来て、そのために三本の角が抜け落ちた。その角には目があり、大言壮語する口があった。その角はほかの角よりも大きく見えた。²¹ 私が見ていると、その角は聖徒たちに戦いを挑み、彼らに打ち勝った。²² しかしそれは『年を経た方』が来られるまでのことであり、いと高き方の聖徒たちのためにさばきが行われ、聖徒たちが国を受け継ぐ時期が来た。

ここに「聖徒たち」とありますが、旧約時代の啓示の難しさがあります。小さな角、つまり反キリストが聖徒たちに戦いを挑み、「打ち勝った」とあるからです。けれどもイエス様はペテロに教会の約束を与え、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。(マタイ 16:18)」と言われているからです。すでに主は、ご自分の血と復活によって世と悪魔に打ち勝ち、教会もすでに勝利者とされています。けれどもここでは反キリストが打ち勝つ、と言っているのです。

旧約聖書では、キリストがまだ到来していないために、神が与えておられる啓示が新約聖書ほどはっきりしていません。イエス様が弟子たちに、「まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。(マタイ 13:17)」と言われました。キリストの到来で開かれた神の啓示があり、それをしばしば「奥義」と呼んでいます。

つまり、神を信じて、この方に仕える者がみな聖徒ですが、新約聖書に与えられた知識に従うと、主に三つの種類の聖徒を挙げています。一つは教会です。ユダヤ人でも異邦人でも、キリストを信じることにより、御霊のバプテスマによって一つの体になった共同体です。

そして、もう一つは患難期における聖徒の姿が、黙示録に出てきます。教会が天に引き上げられ、天で賛美をささげている姿を5章で見ることができます。それから神の怒りが地に下りますが、6章、7章にその間に信仰のゆえに死ぬ、殉教者の姿を見ることができます。そして20章に、ヨハネが、天において教会と区別して、患難期に死んだ魂が復活し、千年王国を受け継ぐことを教えています。「20:4 また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。」教会は、「また私は多くの座を見た。そ

れらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。」とあります。私たちはコリント第一 6 章で、教会が世界を裁き、御使いをも裁くと学びましたね？この存在と区別して、「た私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。」とあるのです。

そして三つ目にイスラエルがいます。ローマ 11 章の最後に、異邦人の救いの完成の後に、イスラエルがみな救われることを教えています。神のしもべとして額に印が押される 14 万 4 千人がいます。14 章では、彼らは初穂として贖われたとあり、イスラエル人がその後に贖われることを示唆しています。そして患難半ばに荒野に逃げる女イスラエルの姿が 12 章に出てきます。黙示録の最後には天のエルサレムの門にはイスラエル 12 部族の名が記されています。ですから、イスラエルが悔い改めて、再臨のイエス様を自分たちのメシヤとして受け入れるのです。この聖徒は、主の御名を否まない、イスラエルの残りの民であるということができのです。

ですから、御使いがダニエルに話しているのは、教会に対してではなく、患難期において迫害を受け、殉教する聖徒たちと、またイスラエル人で神を信じる残された民であると考えられます。特にダニエルはユダヤ人であり、ユダヤ人を意識して彼らのこれからのことを語っている可能性が高いです。教会というのは、新約時代の使徒たちや預言者たちに与えられた特別な啓示であり(エペソ 3:5-6)、旧約聖書に直接的に啓示されている訳ではないのです。

3A 聖徒たちに挑む戦い 23-28

1B いと高さ方への冒瀆 23-25

²³ 彼はこう言った。『第四の獣は地に起こる第四の国。これは、ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。』

初めに第四の国は、これまでの獣と異なります。「ほかのすべての国と異なり、全土を食い尽くし、これを踏みつけ、かみ砕く。」と言っています。ですから、いわゆる歴史上の古代ローマのことだけを話しているのではなく、それ以上に、終わりの日に世界を君臨する世界統一が行なわれることが見て取れます。「全土」といって飛躍しているからです。黙示録 13 章が、克明にその様子を描いています。全世界を網羅する帝国のようなものができます。

²⁴ 十本の角は、この国から立つ十人の王。彼らの後に、もう一人の王が立つ。彼は先の者たちと異なり、三人の王を打ち倒す。

「十人の王」が出てきています。どのような形で世界が十の支配権になるのか、まだ明らかにされていません。けれども、十に区分される時が来ます。その前に世界が、徐々にゆるやかに一つになっていくこととなります。かつてローマ帝国であった欧州が欧州連合として統一しました。ま

だ経済の領域での統一ですが、これから政治統一もされるでしょう。そして世界各地で、今、地域毎の統一の動きが活発になっています。

終わりの日の特徴の一つは、グローバリズムです。世界は、インターネットによって一つにされました。SNS によって、一瞬にして他の世界とつながることができます。世界で一つにならないといけないという圧力が強くなっています。例えばコロナ対策がありますね。それから、環境問題があります。そしてもう一つの特徴は、人間中心主義です。ここの出てくる一人の王とは、人間の目を持つ小さな角です。人間の知性が幅を利かせる世界です。人間が最も大事で、神の主権にものすごい勢いで反発し、反抗します。そしてついに冒瀆にまで向かうのです。これも、西欧発の考えに顕著です。自分の感じていることが真理だとする、道徳相対主義が幅を利かせています。異なる意見は、私の権利を侵害しているとして、排除していきます。そして、人は AI という人工知能をもてあそび、つい最近では、AI ロボットが仏教のお坊さん、教会の神父さん、ユダヤ教のラビになるというような話がありました。またドイツでは、三つの宗教が一つの建物で一つになるとして、建物を建てたニュースも前にありました。

そのような人間中心の統一化の中で、反キリストが登場します。前にお話したとおり、彼は名の知られない人であり、不意にやって来ます。巧言を使って勢力を得ます。これからのダニエル書の預言で、彼についてどのような人なのかがますます浮き彫りにされます。そして、ついに世界が緩やかなに十の国々になっているところ、そのうち三つを自分のものとし、そして最後に全世界を自分の足元に置き、自分が世界総統になります。

²⁵ いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを悩ます。彼は時と法則を変えようとする。聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手に乗せられる。

小さな角にあった口は、このように「いと高き方に逆らうことば」を吐きます。彼は巧言により勢力を得て、そして同じく口によって神に逆らいます。「言葉」による神への反発をもって世の終わりが来ます。言葉の力は今の時代、非常に強いです。「表現の自由」という考えは、近代になって現われました。民主主義が、他の政治制度より優位にあると考える時代に私たちはいます。ちょうど鉄と粘土が混じり合った時に何が武器になるかという「言葉」です。今、話したように、異なる意見を封印して、言葉狩りによって、人々を支配していています。そして、偽教師も権威ある者に対する中傷が特徴です。「それにもかかわらず、この人たちは同じように夢にふけて、肉体を汚し、権威を認めず、栄光ある者たちをののしっています。(ユダ 8)」

そして彼は「時と法則」を変えようとしています。これまであった秩序を変えようとするのです。既存の宗教、風習、習慣、従来の価値観などを全て変えようとしています。例えば、今、性の定義が変えられています。わざわざ英語のジェンダーという言葉を使っていますね。性は自分が男なのか女な

のか、それともどちらでもないという「意識」なのだということです。男と女は、生まれてきた赤ん坊におちんちんがあるかどうかで決まりますね。生物学的な性が性別のはずです。これは、古今東西、どんな時にも変わりなかった秩序です。それが変えられています。同性婚はどうでしょうか？こんなことは、少し前の西欧社会であっても想像さえできなかったことです。それがいとも簡単に、変えられています。

そして、「聖徒たちは、一時と二時と半時の間、彼の手委ねられる。」とあります。預言の時間表を理解するのに非常に大切な期間です。黙示録にこの期間が多く出てきますが、そこで 1260 日とか、42 か月であるとか、一年を 360 日とするバビロンの暦の一年にしたがった、三年半の期間であることが分かります。つまり「時」は一年です。足すと、三年半になります。

ダニエル書の最後に、亜麻布を着た方が天に向けて両手を上げて、永遠に生きる方を指して誓い、「12:7 それは、一時と二時と半時である。聖なる民の力を打ち砕くことが終わるとき、これらすべてのことが成就する。」と言われました。神が聖なる民、つまりイスラエルの民の力を打ち砕き、彼らがへりくだってメシアを求めるようにする期間として定めておられるのです。イエス様は「マタ 24:21-22 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。もしその日数が少なくされないなら、一人も救われません。しかし、選ばれた者たちのために、その日数は少なくされます。」と言われました。イエス様がオリーブ山で語られていたのは、ユダの山地に住むユダヤ人たちのことです。荒らす忌まわしい者が聖なる所に立つのを見たら、逃げなさいと言われ、それが安息日にならないように祈りなさいと言われているのですが、教会ではありません。イエス様は、イスラエルの残りの民のことを、「選ばれた者」と呼んでいます。

黙示録にこの期間が登場します。「11:2 神殿の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはいけません。それは異邦人に与えられているからだ。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みしめることになる。」とあります。そして神殿の前で、二人の証人が預言をします。「11:3 わたしがそれを許すので、わたしの二人の証人は、粗布をまとって千二百六十日間、預言する。」そして獣が現れて、この証人を殺し、しかし、証人たちは三日半でよみがえります。イスラエル人について、12 章、「12:14 しかし、女には大きな鷲の翼が二つ与えられた。荒野にある自分の場所に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前から逃れて養われるためであった。」とあります。しかし、13 章で獣があげられます。「13:5 この獣には、大言壮語して冒瀆のことばを語る口が与えられ、四十二か月の間、活動する権威が与えられた。」当時の暦で一年が 360 日です。ですから、四十二か月も、1260 日も、一時と二時と半時もすべて三年半という期間です。

そしてその時に、聖徒たちが、「彼の手委ねられる」とあります。この詳しいことは、8 章以降に、かつて、ユダヤ人たちが神を敬う人たちが、ギリシアの王によって徹底的に迫害された時の歴

史を基にして、将来に似たようなことが起こることとして描かれて行きます。黙示録 13 章では、イスラエルの残りの民だけでなく、患難期に信じている人すべてが受ける災難が詳しく描かれています。それは、次回、じっくりと見ていきたいと思います。

2B 獣への裁き 26-28

²⁶しかし、さばきが始まり、彼の主権は奪われて、彼は完全に絶やされ、滅ぼされる。

ここに福音の勝利があります。私たちの主イエス様が、今は父なる神の右の座に着いておられます。この世の悪が極みに達し、だれもが反キリストに抗えない状況です。獣の刻印を押されることを拒めば、殺されるだけの世界です。しかし、主が天から戻って来られます。神のさばきが始まるのです。その時に、彼は滅ぼされるのです。黙示録 19 章に、戦うイエス様のお姿があります。テサロニケ第二では、パウロはこう述べています。「Ⅱテサ 2:8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。」

²⁷国と、主権と、天下の国々の権威は、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。』

反キリストをキリストが滅ぼされた後、キリストが御国を立てられ、そして聖徒たちにもその統治を委託されます。この様子は、黙示録 20 章にさらに詳しく書かれています。千年間の統治であり、また天地が過ぎ去った後は、新天新地で天のエルサレムによる御国が永遠に続きます。

ここに出てくる聖徒たちは、大患難における迫害と殉教ではありますが、携拳の前にも、もちろん世にある苦しみがあります。反キリストは現れていませんが、その霊は確かに働いています。パウロは、「Ⅱテサ 2:7 不法の秘密はすでに働いています。」と言いました。イエス様は、世はご自分の弟子を憎み、世においては苦難があると言われました。

その世の国々の支配の中にもまれながら、私たちには各々、任せられた務めがあり、その小さなことに忠実になり、主に仕えるのです。その責任こそが、私たちが将来、御国を受け継ぐ備えになるのです。私たちが、主に任された責任ある働きをするからこそ、将来の御国を豊かに、恵みをもって受け継ぐことができます。世界に、生活に、いろんなことがあるでしょう、けれども、それらは過ぎ去るのです。しかし私たちがしていることは、将来に直結することなのです。

²⁸ここでこの話は終わる。私ダニエルは、いろいろと思い巡らして動揺し、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心にとどめた。」

ダニエルは夢の解き明かしを聞いたら、なおさらのこと恐ろしくなり、顔色も変わっています。け

れども、「心にとどめ」ていました。今は分からないけれども、後に分かるかもしれないから心に留めていたのです。「いったいどういうことなのかなあ。」と思い巡らしながら日々を過ごしていました。これはこの前、話しましたように、ヤコブも、イエス様の母マリアも、全く分からなかった時に、預言のようなことばを心に留め、それが果たしてそうなるのを見て後で見るのです。私たちも、今のダニエルの幻が、今の世においてどうなるのか分からないかもしれませんが。けれども、心に留めていきましょう。主は、必ずこれらの幻を実現されるのですから。

そして、何度となくお話していますが、ダニエルの預言は、イエス様のオリーブ山での、世の終わりについての預言、そして黙示録に直結しています。特に黙示録は、今、読んだ 7 章の預言が基となって話が進んでいます。ダニエルの預言なくして、黙示録の預言は解き明かせません。ですから、今、ダニエル 7 章を読んだのですから、今回は、黙示録 13 章を中心にして、しっかりと、この獣の支配について見ていきたいと思います。